

東日本大震災 被災地の現状視察報告書

平成 24年 6月

一般社団法人 公園メンテナンス協会

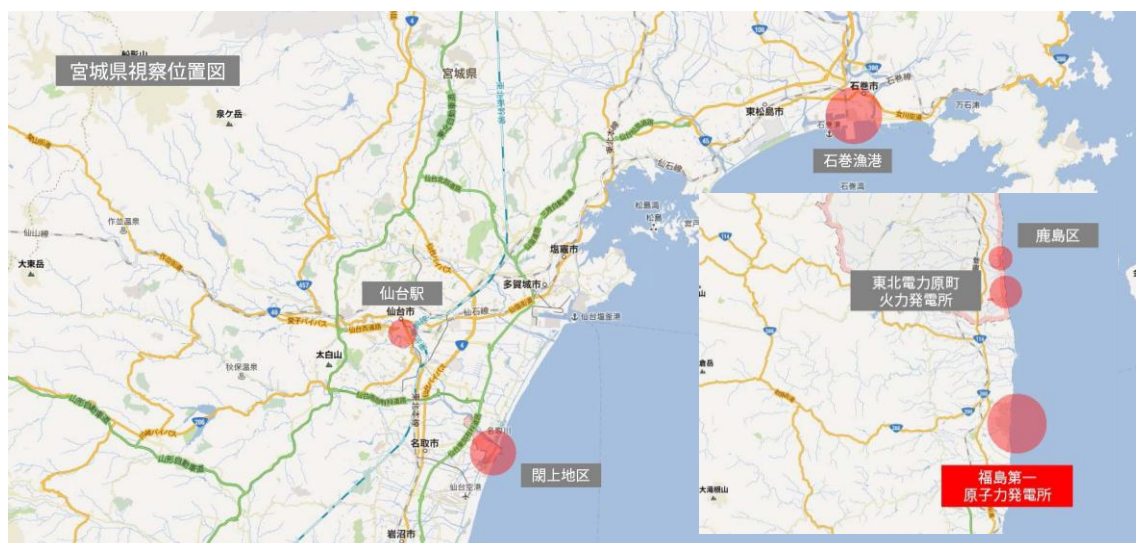
2011年(平成23年)3月11日14時46分18秒、宮城県牡鹿半島の東南東沖130kmの海底を震源として発生した東北地方太平洋沖地震は、日本における観測史上最大の規模、マグニチュード9.0を記録し最大震度は7で、震源域は岩手県沖から茨城県沖までの南北約500km、東西約200kmの広範囲(およそ10万平方キロメートル)に及んだ。この地震により、場所によっては波高10m以上、最大遡上高40.1mにも上る大津波が発生し、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部に壊滅的な被害をもたらした。また、地震と津波による被害を受けた東京電力福島第一原子力発電所では、全電源を喪失して原子炉を冷却できなくなり、大量の放射性物質の漏洩を伴う重大な原子力事故に発展した。これにより、原発のある浜通りを中心に、周辺一帯の福島県住民は長期の避難を強いられている。

当協会では、未曾有の大災害からの復興状況をテレビや新聞等のメディアを通してではなく、私たち独自の視点と感性で確認するために、地震発生から約15か月経過した平成24年6月、最も人的被害が大きかった宮城県沿岸部と、原子力発電所事故による緊急時避難準備区域に指定された福島県南相馬市周辺について現状視察を行った。

【現状視察工程】

平成24年6月28日(火):宮城県名取市閑上(ゆりあげ)地区

平成24年6月29日(水):宮城県石巻市石巻港・石巻漁港地区～福島県南相馬市鹿島区



現場名	宮城県名取市関上(ゆりあげ)地区	日付	平成24年6月28日(火)
地域特性	宮城県の南部に位置する仙台平野(名取平野)の一部で、太平洋に面し、仙台空港に隣接した地域である。		
被災状況	付近に高台が無いことから、津波により人口の1割を超える約600人が遺体で見つかった。多くの住民が避難に車を利用したことにより、大渋滞が発生し、車ごと波にのまれる事例が多かった。		
現状	震災ガレキはほぼ取り除かれ、数棟の半倒壊家屋と建築物の基礎のみが残っている状態で、護岸の復旧工事が施工中であるが、各所に津波による爪痕が残っている。		



震災以前

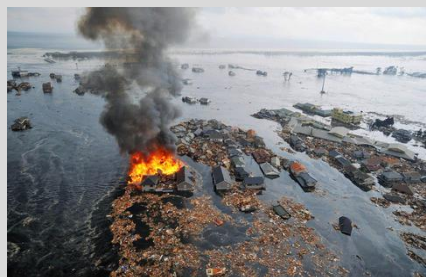


海側から関上浜方向



仙台空港と周辺

ほとんどが、宅地と田んぼで構成される平野で、津波の被害をまともに受けやすい地形となっている。仙台空港についても同様で、堤防が決壊すると機能が停止になってしまう。



現在



宅地跡と思われるが、震災ガレキは整理され、一面このような状況である。



海岸線の松林は相当数が倒木したようである。



津波による柵の崩壊状況(支柱、ビーム部が屈折している。)



取り残された小舟



残置する木造家屋



残置する鉄骨造の建築物



橋梁は依然通行止め

現場名	宮城県石巻市石巻港・石巻漁港地区	日付	平成24年6月29日(水)
地域特性	石巻港は、仙台湾に面し、貿易港として機能すると同時に、各種離島へのフェリーも就航している。また、石巻漁港は、日本一の水揚げ岸壁の長さ(1,200m)と魚市場の上屋根の長さ(652m)を誇り、水揚げ量、水揚げ高ともに日本有数の大漁港である。		
被災状況	津波により、沿岸部の住宅や田畑などをことごとく破壊すると同時に、石巻港に面して集積する工場群も同様に壊滅的な被害をもたらした。石巻市の死者3170人、行方不明者759人。		
現状	震災ガレキはほぼ取り除かれ各所に集積されているが、一部の建築物については、そのまま放置されている。また、地盤沈下による被害も各所に残っている状況であるが、護岸の復旧工事は施工中である。		



震災以前



海側から石巻港方向



日和山公園から海側の景観

日和山公園の裾野に広がる平野部が中心市街地であり、古くからの住宅や商店が立ち並んでいる。また、石巻港に面する地域では、各種工場が群をなしている。いずれも海拔が非常に低いのが特徴である。



現在



日和山公園から海側の景観。殆どの建物が流され、更地となっている。



震災ガレキの集積場



未処理の漁船(石巻漁港)



石巻市立門脇小学校



石巻市立病院 地盤沈下がみられる(災害時のままの状況である)



自動車の集積場(各所にみられる)



津波による破損と思われる



災害時のままの状況である



仮設住宅(石巻市総合運動公園)

現場名	福島県南相馬市鹿島区 他	日付	平成24年6月29日(水)
地域特性	南相馬市は、福島第一原発から約10km～30kmの区域に位置しており、東は太平洋に面し、西は阿武隈高地に接する。市の中心地は海沿いの原町地区で、東北電力原町火力発電所がある。		
被災状況	地震時は、震度5～6を観測し、数十メートルの防潮林を越えた津波は、海岸線から約2km付近までの地域を呑み込み壊滅させた。また、福島第一原発の放射能漏れ事故により、屋内避難区域に指定され、物資不足が深刻化した。		
現状	現在も一部の地域では、放射能漏れに伴う避難を強いられる区域設定が継続しており、各種復旧工事は殆ど進行なく、非常に深刻な状況である。		



震災以前



南相馬市原町区周辺



南相馬市原町区周辺

視察した鹿島区周辺は、海岸沿いの防波堤に守られた地域に田畑や宅地が立ち並んでおり、直近には火力発電所、30km圏内には、福島第一原発がある。



現在



防波堤は崩壊したままである



防波堤は海側に転倒している(津波の引潮による崩壊)



郵便局等があった中心地



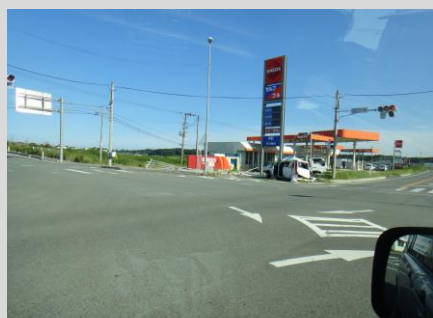
東北電力原町火力発電所(運転停止中)



コンクリート基礎のみ残る



電柱は傾倒したままである



福島第一原発から約15kmの地域である、常磐線小高駅周辺の街や住宅地は、人の気配が殆ど無く、被災車両は放置されており、非常に深刻な状況である。

総括

東日本大震災から 15 か月、関西において被災地の現状を知る方法はテレビや新聞から提供される一方通行の報道にほぼ限定される。その唯一の報道内容も被災地に密着した現状に関するものはごく稀で、復興財源云々の政治的な話題や、原発事故に関しては、政府と東京電力の小競り合いに終始した稚拙な報道が大部分を占めている。このような現状の中で私たちは、本当の意味での「被災地の今」を知ることで、今だからこそ出来る何かを自分たちの肌で感じるために現地へと足を運ぶこととした。

まず私たちが向かったのは、宮城県名取市閑上（ゆりあげ）地区。ここは、太平洋に面した仙台平野の一部で、高台と呼べる避難場所が殆どなく、人口の 1 割を超える約 600 人が津波により命を落とした。震災直後、家屋が燃えながら津波に流される様子や、仙台空港に津波が押し寄せるテレビ映像はこの地域のもので、沿岸部の比較的内陸部に至る地域までの殆どの家屋が津波に流された。15 か月後の現在は、概ね震災ガレキは整理され、被災現場は、一部の被災家屋と建物跡の基礎コンクリートを除いては更地となっている。沿岸部においてはダンプトラック等の工事車両が頻繁に往来し、護岸部の復旧工事を中心に行っている様子であるが、それ以外の箇所については、ガードレールは屈折したままであったり、内陸に流された小舟が放置されていたりと、現時点では必要最小限の手当てがなされている状態のように見られる。ただ、予想していたよりも衛生環境は問題ないようで、周囲が異臭で包まれるといったことは無かった。

次に向かったのは震災による死者行方不明者が合わせて 3,929 人まで膨れ上がった宮城県石巻市。You-tube で公開されている港を飲み込む数々の津波動画はこの地域のものが多い。港から少し離れた高台となる日和山公園からの眺望は震災の爪痕と復興状況を確認することが出来た。本地域においても名取市閑上（ゆりあげ）地区同様に概ね震災ガレキは整理され、被災現場は、一部の被災家屋と建物跡の基礎コンクリートを除いては更地となっているが、地盤が沈下してしまった石巻市立病院付近は震災以降手当てがされていない状態であり、この種の被災状況の解決には時間がかかることが予測され、家を失った被災者の方々は現在も仮設住宅で不自由な生活をしている。本地域の被災者の方々が暮らす仮設住宅は、石巻港から内陸側に車で 15 分程走った石巻市総合運動公園周辺に建設されており、約 1800 世帯が生活している。震災直後は自衛隊の活動拠点となった公園である。

そして最後に、津波と原発による放射能漏れによる二重の被害を受けた福島県南相馬市方面へと向かった。当初の計画では福島県内への視察は予定していなかったが、原発事故の影響を見なければ、今回の未曾有の大災害の本質的な部分を見誤る可能性を感じ、急遽予定を変更し、南相馬市の中心地に近い鹿島区、原町区を視察することとした。

車が南相馬市に入った辺りから、対向車が殆ど見られなくなり、気が付けば後方にも車がない状態となっていた。鹿島区、原町区は福島第一原発から約 30km に位置しており、「緊急時避難準備区域」に指定されていることから、子供、妊婦、要介護者、入院患者の方などの進入が制限されている。しかし実際は殆ど住民を見かけることは無く閑散とした状況であった。従って、復興状況は思わしくなく、海岸沿いの防波堤は崩壊したままで、放置されており、進入防止の措置すらされていない状況である。しかし、防波堤内側の平野部の震災ガレキは撤去され、他所同様に更地となっていた。

帰路、道に迷ったこともあり、原発から約 15km に位置する常磐線小高駅付近を通過したが、本地域は警戒区域とされ、立ち入りが制限されているらしく、県道の歩道上には被災した車両が放置されており、コンビニエンスストアも閉店、住宅街も人の気配が感じられない状況であった。唯一遭遇したのは、除染作業の準備測量をする作業員 3 名のみであった。原発事故による影響は原発を中心に少なくとも半径約 30km の地域から殆どの住民を追い出す結果となった。深刻な状況である。

津波による被害と原発の放射能漏れによる被害、どちらも今なお深刻であり、今後も全国民が力を合わせて進めていかなければならない大事業である。その大事業のなかで、たとえ少しでも、協会として、そして個人として貢献できることを探していきたいと感じた視察であった。

尚、報告書作成に当たっては、被災者の方々に配慮した記述を大前提としたが、不十分な点もあるかもしれませんので、その際にご容赦頂ければ幸いです。

平成 24 年 6 月
一般社団法人 公園メンテナンス協会
東日本大震災復興調査委員会